

「異文化を認め合う」 共存型社会を長岡から発信したい」

新潟県長岡市の市民と在住外国人たちの交流の場と情報発信基地として知られる長岡市国際交流センター「地球広場」。センター長を務める羽賀友信さんは、20代のころから海外で国際協力に携わり、現在は国際理解教育の普及に努める地元の有名人だ。そんな羽賀さんが考える、長岡が元気になる地域発の国際交流・国際協力の姿とは。



長岡駅前の「地球広場」

長岡駅に程近い市民センターの1階にある長岡市国際交流センター「地球広場」。広々としたスペースにテーブルやイスが配置され、壁にはイベントの案内や地域在住外国人のための情報

が所狭しと並び、夕刻、ボランティアの高校生たちが徐々に集まり、思い思いに掲示物の作成や近く開催されるイベントの準備を始めていた。同センターは地域の国際交流の情報発信基地として在住外国人を含む多くの市民に親しまれ、中国語やポルトガル語による外国人のための生活相談会や季節のイベント、

在住外国人の出身地の文化を紹介する催しなどを定期的に行っている。

空手で鍛え上げられたがっしりとした体格と、柔らかな笑顔が印象的なセンター長の羽賀友信さん。2001年の開館以来、自身の経験を生かし、地域発の国際交流・国際協力を実践するという強い信念のもと、地球広場を拠点にさまざまな事業を展開している。

カンボジアでの忘れられない経験

上国支援への参加などを通じた経験や国際感覚が買われ、羽賀さんがセンター長に就任した。以来、センターの活性化とともに外国人と地元住民との距離が縮まり、市民の間で国際化や国際協力への関心が高まっている。

羽賀さんは、「以前は国際交流といえば、主に欧米の人々と英語を話して交流するという、まるでサロンのような国際交流イベントが多かった」と話す。1990年代に流行のごとく、「国際化」が叫ばれ、姉妹都市交流などが全国的に進められていたが、地方から見るとそこには実体がないと感じていた。しかし21世紀が近づき、長岡市にも就職や留学などで2000人を超える在住外国人が住むようになった。市としても、彼らの生活上の支援を組織的に行う必要があったこと、実体の伴った国際化を実現させていくという目標があったため、長岡市国際交流センターを設立。これまでの独自の国際交流活動や開発途

羽賀さんの経歴は実にユニークな経験に富んでいる。「幼いころから常に世界の広さにロマンを感じていた」という彼は、青年時代より多くの国を旅してきた。例えば、「大学で動物医学を専攻し、卒業後に獣医を目指して研究のためアフリカへ向かうが、その途中、好きな史跡を見ようとイスラエルへ立ち寄り、「テロの混乱に巻き込まれ、誤ってイスラエル軍部隊に捕捉される」「疑いは晴れるが、空手三段の実力が目に留まり、部隊の代表として空手大会への出場を依頼され、優勝」「イスラエル特殊部隊の設立に当たり、現地で教官に就任」彼が語る体験の数々はまるで映画のようにドラマチックだ。中でも、自身の進路に特に大



地球広場に集う長岡市の中高生たち。国際交流イベントの企画・運営・実施には、ボランティアの学生らが大きな役割を果たす。「将来は国連で働きたい」「外国の文化に興味がある」「友人ができて楽しい」など、動機はさまざまだが、活動を通して、地域文化の発信や市民連携の在り方を体験から学んでいる



Haga Tomonobu

長岡市国際交流センター「地球広場」
センター長

羽賀 友信

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.27

大きな影響を与えた出来事がある。79年、カンボジア内戦の激化により発生した難民を救援するため、日本はタイ・カンボジア国境地帯で初めての国際的な緊急援助活動を行った。中東滞在時に多くのパレスチナ難民たちと触れ合う中で、難民支援に強い関心を持つていた羽賀さん。すぐさま一般公募による民間参加としてJICA関係者や医療従事者とともに医療チーム（JMT）に加わり、現地に飛んだ。業務調整を担当し、約2年半にわたり病院の建設や運営などに携わるが、その間、強盗の襲撃で仲間を亡くし、自身もまた後に銃で撃たれけがをする。治安が極めて不安定な状況の中、なぜ逃げることなく最後まで活動を続けたのか。

「襲撃を受け、仲間は死に、自分は生き残った。何か大きな使命を与えられた気がしたんです。立場に関係なく現場で誰もが危険にさらされている状況で、難民たちとの交流を通じ、彼らが自分たちとまったく同じであること、そして彼らを助けるには上からではなく同じ人間として共感し、同じ目線で支援していく必要性を思い知らされました」

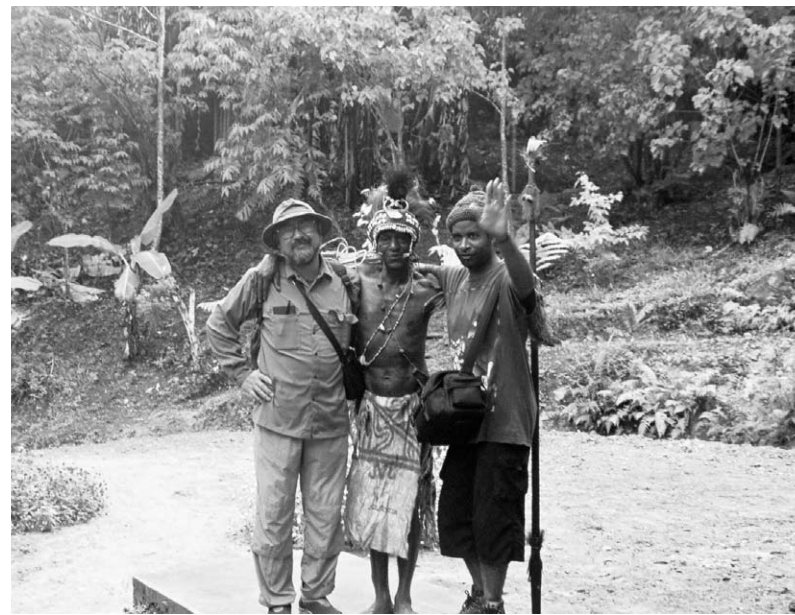
羽賀さん自身も県内の小中学校、高校などで、年間100回近くも講演活動を行っている。これまでの体験や独自の人生観を織り交ぜた国際理解教育の話が大きな反響を呼んでおり、学校からの依頼が絶えない。「中には高校を卒業するまでに私の話を5〜6回聞いてきたという子もいます」と笑う。そしてその話を聞いた学生たちが、ボランティアとして参加するようになるケースも多い。

長岡の国際化を担う人材を

羽賀さんは、国レベルの大きな事業では難しい、地域性を生かした市民によるきめ細かい国際交流・国際協力の普及を目指し、まさに東奔西走している。そんな彼が特に力を入れてるのが、国際的感覚を持った人材を地域から創出することだ。常に子どもたちを、これからの地域と世界をつなぐ「未来市民」と呼び、子どもたちの国際意識を高くむためのプログラムを数多く実施している。

それらの中にはJICAと連携して実施するものも多い。その一つ、「いいがたJICA Kidsプロジェクト」は、学校の総合学習の時間などを活用して、地元出身の青年海外協力隊が派遣されている国の学校とJICA Net でつなぎ、生徒同士がリアルタイムで交流するもの。異文化に対する学びや、自分たちの文化の発信を通じ、「生きた教材」として国際理解を深める貴重な機会となっている。こうした実践を重ねることで、実際に子どもたちが現地に赴いてさらに交流が進んだり、プログラムに参加する代々の子どもたちの影響で地域全体の国際理解が促進するなどの効果が表れている。また、子どもたちの先輩となる隊員と世代を超えたつながりを構築することで、「将来協力隊に参加してみたい」と口にする子どももいるという。

長岡市国際交流センターとJICA地球ひろばとの共催で03年から実施されている「いいがた国際協力タウンミーティング」は、多くの市民や在住外国人、NGOなどがシンポジウムや企画展示に参加し、地域と世界をつなぐ恒例イベントとなっている。地元の中高校生、大学生なども企画・運営・実施にボランティアとしてかかわる。



2002年、パプアニューギニアの学校建設を支援している長岡市のNGOと、教材を届けるために訪れた羽賀さんらを、村人が正装で出迎えてくれた。「文化はそれぞれの土地と同根同心のもの。それらを尊重した上で、援助を届けることが大事」と言う

情報通信技術を活用し、遠隔講義・テレビ会議・オンライン学習などを行うJICAの遠隔技術協力事業。

Haga Tomonobu

はが・ともぶ 長岡市国際交流センター「地球広場」センター長。1950年新潟県長岡市出身。80年、一般公募により日本のカンボジア難民救援医療プロジェクトに主任調整員として参加。帰国後は長岡で空手を教える傍ら、エジプト、オーストラリアなどの大自然を通して、引きこもりや不登校の子どもを自立支援を行う私塾「自然塾」を主宰。中東やアジアを中心に50カ国以上を旅し、国内外で長年にわたり国際交流・国際協力に携わる。「パレスチナ・イスラエル日本学生合同会議」など、JICAと連携してさまざまな事業も実施している。2001年より現職。03年JICA地球ひろば国際協力サポーターに就任。長岡市教育委員。いいがたNGOネットワーク顧問。空手道新武会会長。

人的貢献に基づく国際協力をうたう緒方貞子・JICA理事長の考えに深く共感しているという羽賀さん。「国や組織じやなく、人」による国際協力を実践するため、今の若い世代の関心を高めていきたい。

国際化と市民連携を通じて、地域を元気に

長岡は、まちの存続を脅かす数々の危機からよみがえってきた

た復興の地域でもある。幕末の戊辰戦争による壊滅。太平洋戦争の空襲による被害。そして04年、07年に新潟県中越地方で発生した地震がもたらした犠牲。羽賀さんは、こうした復興の経験を、世界に発信すべき長岡の財産と位置付けており、「平和構築の一つの事例にもなる」と強調する。

特に04年の地震では、羽賀さん自身、余震の続く中、バイク隊を率いて、外国人被災者の救援活動に奔走した。「お国柄、『地震』を知らない人も多く、『世界が壊れたかと思った』とおびえる人もいました。さぞかし不安だったことでしょう。その後、センターを中心に災害時における外国人の支援体制のネットワークを構築し、各言語で避難方法や避難場所を案内するパンフレットも製作した。今では、その経験とノウハウを学ぶため、全国の地方自治体からの指導依頼が増えている。センター長就任以来、羽賀さんが重視し、センターでの活動

の原点となっているのが、長岡に古くから伝わる「互尊独尊（人を生かすことは自分も生かすということ）」という考え方だ。グローバル化が進む現在、世界の紛争や異変が、日本の地域や私たちの生活とより密接につながっていることを実感する機会が多い。

「自分たちが幸せであればいい」という考え方は今後世界は成り立たない。世界の中の自分、世界の中の地域という視点を持ち、自分たちの文化を発信しながら異文化も理解し、皆が違つことを認め合う共存型の社会にシフトさせていくべきです。そのためにも、国に頼るのではなく、地方が主体となり、市民がコミュニティの構成員として責任を負い、そこに暮らす外国籍の人たちとともに、前向きに生きていく。それが本当の市民連携と呼ばれるものであり、これからの地域社会の活性化に欠かせないものです。国際交流センターの地球広場は、そのための大事な拠点なのです」



2004年、JICA地球ひろばの国際協力サポーターとしてアフガニスタンを訪問。破壊された装甲車など、内戦の爪あとが残る現地を視察したほか、長岡市の小学生からの手紙や援助物資を現地の学校と子どもたちに届けた。04年の新潟県中越地震のときには、逆にアフガニスタンの子どもたちから長岡へ多くの励ましの手紙が寄せられた



地球広場ではさまざまな季節のイベントを企画しており、年初めには日本の伝統的な遊びや正月の文化、習慣などを在住外国人に紹介するイベントを行っている

長岡の復興経験は、世界に発信すべき大きな財産